

1 活用推進に向けた校内体制

全国学力・学習状況調査を活用した指導改善は、管理職のリーダーシップの下、教務主任や研究主任等を中心として、全教職員で進めていく必要があります。

校内研究全体の運営に準じた組織体制の一例を示しますが、学校や地域の実態に応じて最適な体制を整備することが大切です。



2 校内研修の具体例

自校の調査結果は、多くの活用方法が考えられますが、最も有効なのは「教員の指導改善を検討する校内研修」の場面です。県内のいくつかの学校からお話を伺った中から、ほとんどの学校が共通して取り組むことができるものをいくつか御紹介します。

なお、校内研修の他にも、自校の調査結果は、各種広報紙や HP・SNS により保護者や地域に情報発信したり、学校評価の指標の参考にしたりすることもできますので、ぜひ活用ください。

A 「調査問題の意図を知る」（4月～）

（目的）教科に関する問題を解き、職員が出題の意図を知る。

（流れ）国語又は算数（数学）の問題を全員が解いておく。

「国語グループ」「算数（数学）グループ」に分かれて、児童生徒の誤答を予想し、指導上の留意点等について協議する（特に、中学校では、当該教科以外の方も参加することが大切です）。

各グループの協議結果を全体で共有する。



B「文科省が提供する結果データの見方を知る」(5月～)

(目的) データの見方を知り、調査結果提供後、すぐに分析できるようにする。

(流れ) 前年度データをもとに、文科省が提供する結果データの見方を確認する。(教務主任や研究主任等が全体に説明するとよい。)

前年度に整理した自校の課題などから、今年度の結果を分析する際のポイントを確認する。

(全教職員で共通理解を図ることが大切である。)



C「県の『誤答分析シート』を作成する」(8月～)

(目的) 児童生徒の誤答を分析し、改善方を検討する。

(流れ) **教務主任・研究主任等が中心となり、文科省が提供する結果データから、誤答分析に適切な設問を選定しておく。**

「国語グループ」「算数(数学)グループ」に分かれて、児童生徒の誤答を分析(どのような考えで誤答に至ったのか考察)し、その改善方策について協議する。

各グループの協議結果を全体で共有し、学校全体としての分析と改善方策を記入して「誤答分析シート」を完成させる。

授業や家庭学習などの指導場面において、具体的な指導改善につながる方策が求められます(学校全体の課題として捉えて、全ての学年で実践する)。

改善方策に基づく教育実践を評価・検証して、さらなる改善につなげることが有効です。

詳細は、「p43 2 誤答分析シート」を参照ください。



D「県の『経年分析シート』を作成する」(8月～)

(目的) 自校の結果について経年分析し、改善方を検討する。

(流れ) 教務主任・研究主任等が中心となり、教科に関する調査結果の経年変化から、成果と課題をまとめ、分析のポイントを整理しておく。

「国語グループ」「算数(数学)グループ」に分かれて、「どのような取組で成果があったのか」「どのような取組で課題を改善していくのか」について協議する。

各グループの協議結果を全体で共有し、特に、継続的な課題に対する学校としての改善方策を記入して「経年分析シート」を完成する。

各教科の資質・能力に焦点を当て、全学年で共通理解を図りながら指導改善に取り組んでいくことが大切です。

質問調査への回答結果に関する経年変化については、学校運営に関する成果と課題を分析し、学校評価の指標にするなどの活用が考えられます。

詳細は、「p42 2 経年分析シート」を参照ください。

